

私の好きな国「日本」、尊敬する人「明治天皇」

ドナルド・キーン

私は子どものころから日本に「俳句」という短い詩歌があることを知っていました。しかしそれに魅力を感じるようになったのはずっとあとのことです。私が日本の文学に関心をもったのは昭和十五年（一九四〇）でした。当時、ナチス・ドイツがヨーロッパ各国に侵攻し、その年の秋から英国への空爆が始まり、毎日、新聞を読むのが辛かった。ナチス軍を止めることは不可能ではないのか、そんなことを心配していました。

そんなとき、ニューヨークのタイムス・スクエアの本屋で、『源氏物語』の英訳本を見つけたのです。これまで西洋型の教育を受けてきた私にとって、日本に小説があるということ自体が驚きでした。この本は『源氏物語』の最初の英訳で、いまから見ると誤りがあったと思

いますが、大変美しい英語で翻訳されていました。内容もとても魅力的でした。私が生きていた世界とはまったく違う、戦争のない、しかも美しい人間模様が描かれていたからです。私はそこに一種の救いを感じました。

『源氏物語』を読んでいて、一番驚いたのは手紙でした。紙を選び、墨の濃淡や筆勢を考え、単に "I love you" と書くのではなく、何か和歌が添えられていたからです。和歌は美しい言葉で綴られていて、直接的ではなく、間接的に自分の思いを伝えている点に魅力を感じました。私のいた世界は何でも直接的でした。「殺すぞ」とか「勝つぞ」とかいうように。『源氏物語』は長い本でしたが、私はそれをもう一度読み返しました。

こういうわけで、日本語がますます好きになり、九月

に大学が始まると、日本について何か勉強しようと思いましたが。そして角田柳作先生の講義を聴くように勧められました。角田先生は日本の思想史を教えてくださいました（先生のご専門は、江戸時代の儒学者でした）。学生は私たった一人。当時アメリカと日本は緊張関係にあったので、日本思想史に関心をもつ学生は誰もいなかったのです。そこで私一人のために授業をやるのは無駄であると思い、先生にご辞退申し上げると、先生は「一人いれば十分」と仰ってください、私一人のために講義をしてくださいだったのでした（その後、二人増えましたが）。私たちは先生を大変尊敬していましたし、愛していました。先生は当時、七十歳に近かったでしょうか、ほんとうに素晴らしい先生でした。

昭和十六年（一九四二）十二月八日、アメリカと日本の戦争が始まりました。しかし私は、鉄砲で人を殺したり、戦闘機で町に爆弾を落としたりすることは自分にはできないと思いました。そんなとき、海軍に日本語の学校があることを聞きました。ワシントンに行つて志願したところ、すでに日本語を少し知っていたこともあつて入学できました。学校はカリフォルニア大学バークレー校にあり、学生は三十人ほどでした。海軍は私たちに命じました。「おまえたちの任務は日本語を勉強すること

だ、海軍のことなど知る必要はない」と。

日曜日以外、毎日四時間の授業がありました。二時間は読書、一時間は会話、一時間は書き取りという時間配分でした。このなかでは書き取りが一番難しかったです。もちろん私たちは、正字と旧仮名遣いを憶えました。授業は本来十八ヶ月で日本語をマスターするはずだったので、私たちは十一ヶ月に短縮しました。日本語ずつめの毎日でした。食事のときも日本語で会話しましたし、新聞などに分からない字があると辞書を引いて読みました。必要があれば、日本語で手紙も書きました。

卒業後、私たちはいろいろなところに派遣されました。私はハワイでした。私の任務は日本軍が残した書類の翻訳でした。この仕事を始めたとき、何か素晴らしい発見があつて、戦争をすぐに終わらせることができると思ったものです。しかし、いざとりかかってみると、無味乾燥そのものでした。全然おもしろくない。たとえば、連隊に所属している将校たちの名前だけが書かれているリストとか、そんなものばかりで、これを翻訳して何になるのかと思いました。

しかし私は、ひとついい発見をしました。ほかの人が避けている大きな箱があり、そのなかに小さな黒い手帳がありました。そしてほかの人が避けていた理由もわか

りました。血痕の臭いがしていたからです。それは戦死した日本兵からとってきた日記でした。私はなるべく血痕がついていない部分を選んで読み始めました。まず字に慣れることから始めて、それからだんだん内容がわかるようになってきました。なかには家族にも言えないようなことも書かれていました。戦時中の私が一番多くやった仕事は、そういう手書きの日記や手紙を読むことでした。ときどき日記の最後には、英語で「これを拾ったアメリカの兵隊、この日記を日本にいる私の家族へ送ってほしい」と書かれていました。そして送り先の住所も書かれていました。そういう日記をいくつか私はとっておいたのですが、残念なことに沖繩に行ったとき、没収されてしまいました。

私は日本人を敵だと思ったことはありません。捕虜の尋問もしましたが、彼らとはすぐに友だちになりました。そのうちの一人は、百歳でいまでも生きています（このあいだ会ってきました）。友だちになりましたが、一応聞くべきことは聞きました。たとえば、「大和と武蔵という戦艦を見たことがあるか」と。見たという人は一人もいませんでしたが、そういう質問をしたあとは、最近どんな本を読んだかとか、どんな音楽を好きかとかを聞きました。私はとても楽しかったし、彼らも楽しかったと思

います。こういうわけで戦時中の私は何らかのかたちで日本語に接していたのです。

戦争が終わったとき、私はグアムにいました。戦争は永久に続くだろうと心配していましたが、そこで玉音放送を聴きました。当時私はあることで上官と喧嘩をしてしまいました。私は日本に行きたかったのですが、上官はそれを知っていましたから、私を中国の青島へ送りました。そこで四ヶ月ほど過ごしていたら、海外服務は四年間だからもう除隊してもいいと言われ、上海からアメリカへ向かったのですが、厚木で降りました。どうしても日本を見たかったのです。そして廃墟の東京も見ました。このたびの震災を見たとき、当時の東京を思い出しました。東京を見た多くのアメリカ人は、日本が立ち直るのに少なくとも五十年はかかるだろうと見ていました。そうでなければ、戦前の日本のレヴェルにはもどけないだろうと。また日本語を憶えた多くの仲間には日本語を捨て、元の仕事に戻り、あるいは別の仕事につきました。けれども、私は日本をもっと勉強したいと思っていましたから、大学に戻って角田先生の教えを受けました。このようにして私の生涯が決まったのです。

私は二十五年をかけて『日本文学の歴史』（全十八巻、

中央公論社、平成六―九年）を書きました。最初は二年間で書けるだろうと思っていたんですけどね。完成したら、しばらく文学の世界から離れたいと思い、誰か作家ではない日本人のことについて書きたいと思うようになりました。そこで気づいたのは、英語に明治天皇の伝記がないということでした。ある宣教師が書いたものがありました。もつと新しいもので、明治天皇の一生を書いたものはなかったのです。そこで私はまず『明治天皇紀』を買って読みました。『明治天皇紀』は最初、私にとってそれほど面白くはありませんでした。しかし素晴らしい本です。この本は二つの意味で素晴らしいと思います。一つはさまざまな事実を簡単に、かつはつきりと書いてあること、もう一つは典拠が示されていることです。これがあれば、『明治天皇紀』の記述で満足できなければ、また別の本で調べることができる。本を書く上で、これは非常に助かりました。

私は明治天皇が生まれた日から書こうと決めました。そうなると、孝明天皇のことも調べなければならぬ。しかし、孝明天皇のことについて書いたものは、ほとんどありませんでした。孝明天皇が明治天皇と同じような人だったのか、違う人だったのか、ほとんど何も知られていません。『孝明天皇紀』がありました。だいたい

漢文です。読むのに大変苦労しました。しかしどんなに時代が変わったのかということを知るために、それは必要なことだと思いました。

また明治天皇が小さいころ、どのようなおもちゃを使っていたのかとか、そのようなものも紹介したいと思いました。いまの日本の子どもたちが使っているものとは違うものでしょう。どんなに変化があったのかということ。私は京都の友人に頼んで、明治天皇が生まれた家に行くことができました。嬉しかったんですが、なかに入ってみると何にもないんです。これは大変な驚きでした。あんなに有名な天皇なのに。畳もなければ壁もない。私が行ったとき、瓦が葺きなおされていましたが、それを葺きなおしたのは日本政府ではなく中山家。つまり明治天皇の生母の家族でした。毎年お正月、明治神宮にたくさんの方がお参りにくるけれども、一般の人は実際のところ、明治天皇についてほとんど知識がないんじゃないかと思えますね。

明治天皇を書くにあたって、はじめは普通の本にしようと思いました。しかし私が知らなかったこと、わからないことがほとんどでした。私知っていたのは日本語だけ。当時の政治がどうであったとか、あるいはもっと簡単なことで、これはいまでも分かりませんが、明治天

皇は普段どのような言葉を使ったのかということです。御所ことばだったのか、標準語だったのか。いろいろわからないことがあります。三十年前だったなら、明治天皇に会ったことのある人がまだ生きていたでしょう。その人に聞くことができたはずです。でも、いまはもう一人もない。

なるべく私は面白い本にしようと思いました。『明治天皇紀』はそれとして、私は人が面白く読めて、しかも、よりよく明治天皇が理解できる本を書こうと思いました。『明治天皇紀』は全十三巻、一万頁もあります。最初に面白くなかったと言いましたが、全部通して読んでみると、読めば読むほど面白い本だと思いました。その過程で明治天皇のことも好きになり、尊敬するようになりました。

『明治天皇』を書いたとき、最も力を入れて書いたのは大津事件の部分でした。あのとときほんとうに危険な状態でした。ロシアと戦争になったかもしれないのですから。明治天皇はニコライから午餐に招待され、ロシアの軍艦で共に昼食をとりました。明治天皇がロシアの軍艦に乗ると、天皇がロシアに拉致されてしまうと思われしました。かつて朝鮮の大院君が清国人に拉致されたように、そういうことは実際起こり得るんです。あのととき、もし

明治天皇が乗り込んで軍艦が出発してしまったならば、何もできなかったですね。当時のロシア人は食事中でも煙草を吸う習慣がありました。明治天皇はロシアの習慣にしたがって煙草を吸いました。明治天皇は、できるかぎり外国の人たちを理解しよう、あるいは上手に付き合っていこうとしたのだと思います。

明治天皇は、ドイツのヴィルヘルム一世や、ロシアのニコライ二世のようなヨーロッパの皇帝や国王と比べても全然違いました。ヨーロッパ人はもちろんヨーロッパを中心に见ています。たとえば、ルイ十四世が旅行すると、その町に彼の銅像が立ちましたし、彼はすごく豪華な服を着ていました。そして同じ服は二度と着ることはありませんでした。十九世紀まで、王様は病人に触れると病気になるとか、本気でそう思っていたんです。また簡単に人を処刑にするとか、贅沢をきわめるとか。私はそれが普通の王様だと思っていました。これに対して明治天皇は贅沢が大嫌いでした。継ぎ接ぎだらけの軍服を着ていたといいます。また日清戦争が終結したとき、日本が勝利に傲慢になり、清国を侮辱するようなことはあってはならないことを詔書で述べましたし、日露戦争では旅順が陥落したとき、ロシアの將軍ステッセルの武人としての面目を大切にせよとも言いました。戦地の兵

士を思いやり、横暴なことは一つもありませんでした。そういった点で明治天皇は、ヨーロッパの皇帝や国王とは全然違っていました。当時の世界で本物の皇帝は、明治天皇一人だけだったというのが私の考えです。

また昭憲皇太后も素晴らしい人でした。彼女には子どもがいまいませんでしたが、それを補ってあまりあるほど、皇后としての役割を立派に果たしました。憂鬱なときや病気のときなどで天皇が行事に出席できないときは、代わって軍の演習や軍艦の進水式などにも行啓していますし、日清戦争のとき、明治天皇が広島の本営に一人でいるのを気遣い、天皇を喜ばせたいという一心で、権典侍を連れて広島へ向かいました。そんなこと、普通の女性だったらできません。そればかりでなく、傷病兵が収容されている病院を訪問し、兵士たちを慰問しています。洋服を奨励したことは、私が一番感心しているところですね。文学的な才能もありました。当時の錦絵なんか見ると、彼女は広く国民に慕われていたと思います。しかし昭憲皇太后の伝記は、あまりありません。誰かが伝記を書くべきです。しかもなるべく男性が書くべきだと思います。

明治天皇は和歌をたくさん詠みました。和歌を詠むことで、自分の暗い気持ちを克服していったように思います。

す。その明治天皇に、こんな和歌があります。

わが園にしげりあひけり外国の

草木の苗もおほしたつれば（明治三十七年）

国際的な内容の和歌だと思います。このような和歌は、明治天皇以前の歴代天皇は詠まなかったのではないのでしょうか。

（コロンビア大学名誉教授）

附記 本稿は、平成二十四年九月八日（土）、ドナルド・キーン宅にて行なったインタビューをもとに、明治聖徳記念学会事務局の責任において編集を加えたものを、先生のご校閲を得て掲載するものである。インタビューにあたっては、ドナルド・キーン先生をはじめ、ご子息のキーン誠己様、ならびに秘書の平井史朗様に多大なご高配を戴きました。記して感謝申し上げます。

明治聖徳記念学会事務局